
学園戦争

pw

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園戦争

【Nコード】

N5800Q

【作者名】

p w

【あらすじ】

進級がかかったテストで倒れた佐藤。その進級を邪魔する教師の木下。御崎と田中が木下を学校から追い出そうとする話。

第1章 プロローグ

神奈川県のとある私立高校、そこでは今日定期テストが行われていた。このテストは来年進級できるかどうかがかかった大事なテストだった。今は3時間目の数学が終わって、次の英語のテストまでの短い休み時間……。

御橋は他の生徒が最後のあがきをするのを見回して、ふとひとりいないことに気づいた。

「あれ、田中のやつまだ来てなかったのか？」

御崎はすぐ後ろに座っている佐藤に尋ねた。

「そういえば、来てないね、どうしたのかな？」

田中は小学校からの腐れ縁だがテストどころか普通の授業さえさぼらないまじめなやつなのに……。

「体調でも崩したのかな？」

「いや、あいつは昔から丈夫で学校なんて休むはずがないんだ。それにテストってなら這ってでもくるようなやつだしな」

「あはは……そうだったね。そんなに成績悪いわけでもないのにね」
そうだ。田中はいわゆる努力家でスポーツも勉強も学校ではトップクラスだった。昔は御崎も天才と呼ばれるほどだったが才能だけで努力をしなかったから中学のときに追いつかれて高校ではとうとう追い抜かれてしまった。その理由の一端には高校入学が決まっただけから一切勉強せざいた御崎にもあるのだが。今でも田中は、お前は天才だから努力してないとすぐ追いつかれちまうからなーとか思っているんだろう。こっちはもういまさら努力なんてする気はないというのに。

まあ、あいつは今頃どうせ学校にくる途中におばあさんが転んでいたから助けたり犬が捨てられていたからわざわざ餌を買い、仕舞

いには、外人さんに道を聞かれて案内してあげますよ、とか言っ
一緒に付いて行っってしまったのだろうな。

「田中ならあり得るかも」

心の声を聞き取って佐藤が答える。

「私はそんなことできないわよ」

……どうやら知らずに声に出ていたようだ。

「それで、佐藤は勉強しなくていいのか？」

とりえず田中のことは置いといて聞いてみる。

「私はもうやれることはやったから大丈夫なの」

「そうは言っても今回赤点とったら留年だろ」

「うっ……。今回は大丈夫よ……。きっと」

「それよりあんたの方こそ勉強しなくていいの？ あんたも下手し
たら留年でしょ？」

「俺は別にいいのさ」

「どうして？」

「すでに諦めてる」

「……あんた、もしかして全然勉強してない？」

「もちろん」

俺は胸を張って答えた。

「留年するつもりなの？」

「いや、留年するつもりなんてこればっちもないけど？」

「はあ、それでいいならいいけど」

佐藤も小学校からの付き合いで、高校も一緒になった。

話をしているうちに担任の木下が来た。

「うわっ、次は木下かよ」

木下は、態度も性格も捻じ曲がっていて、自分が気に食わないや
つは課題を山ほど出したり、廊下に立たせるなど時代錯誤なことま
でしていた嫌な教師だ。

テストなどに限っては、少しでも不正紛いのことを見つけてはそ
の場で追い出し、もちろんテストは0点にする。そんなことをされ

ると追い出された本人はもちろんこちらも迷惑なのだが・・・。
そんなことばかりするので生徒はもちろん教師たちからも嫌われている、ろくでもないやつだった。それなのにクビにならないことにみんなが疑問に思っている。

そうしてると何も言わずに木下は問題用紙を配り始めた。と、そこでトイレに行っていたらしい男子生徒が教室に入ってきて自分の席に座ろうとした。

「おい」

「え、僕ですか」

「お前、なに座ろうとしている？」

「テストが始まるからですけど……」

男子生徒は至ってまじめなものだった。

「もうテストは始まっている。お前はテストを受ける資格はない」

「そんな、まだ開始時間まで三分もありますよ」

「そんなことは関係ない。俺が始めたと言っているのだから始まっているんだ。それともなにか不満でもあるのか？」

「……いえ」

男子生徒もそこで言い返したらもつとひどいことになるかと分かっている。なので教室を出ようとした。

確かにすでに問題用紙は配っていたが、わざわざ早めに配って少し遅れたからといって追い出すとは横暴だと誰もが思っていた。しかし自分もひどい目にあいたくはないので誰も何も言わない。俺もその中の一人だが。

男子生徒と入れ違いにもうひとりの生徒——田中が入ってきた。

「お前もだ、出て行け」

木下は田中を睨み付けて言った。

「まだ時間にはなっていないですよ」

「それは俺が決めることだ。それにお前は、3時間目まで居なかったそうじゃないか遅刻しておいてそんなことを言う権利があるのか？」

「彼には私の手伝いをしてもらっていたのですよ」

そう言いながら田中の後ろから学年主任の坂下が入ってきた。

テストを休ませてまで教師が生徒に手伝いをさせるわけがないと誰もが思った。しかし、田中が席に着いても木下はなにも言わなかった。

「ほら君も席に着きなさい」

成り行きを見守っていた先ほどの生徒にもそう言つて、坂下は教室を出て行った。木下はその背中をずっと睨み付けていた。明らかにいらついているのだろう。この学校で木下に言うことを聞かせられるのは坂下しかない。校長さえも文句は言わないからだ。過去に木下の態度はひどすぎると校長に訴えた教師がいたが、その1週間後に事故にあつて今も入院している。その当時の教師たちは木下が事故を起こせたとか呪いだとか噂して今では誰も文句を言わなくなつた。坂下が文句を言えるのは昔はふたりは親友同士だったという噂が有力だ。あくまで噂だけど。その時間は他には特にトラブルもなく終わった。

HR後の帰り道。

今はテスト期間だから午前中で終わりだ。

「おい、田中お前今まで本当はどうしてたんだ？」

「いやー、実はさ今朝学校に来る途中におばあさんが転んでさ」

「それだけだったらこんなに遅れないだろ？」

「他にも子犬が捨てられていたから餌を……」

「いや、もういい。そのあとは分かる」

まさか本当にそんなことをしていたとは、我が親友ながらとつてもお人よしだ。

「それにしても坂下先生がいなかったら今日は丸々さぼりになつてたんだよ？　ちゃんとお礼言つといたほうがいいよ」

「うん、もちろん」

「それじゃ、また明日ね」

「じゃあなー」俺は適当に手を振る。

「また明日」

そう言っただけで佐藤は帰っていった。佐藤の後ろ姿が見えなくなったころ田中が話しかけてきた。

「それで出来はどうだったんだ？」

「……なんのことだ？」

「おいおい、とぼけるなよ。赤点は回避できそうなんだろうな？」

「回避できただろ……出来たと思う……出来たらいいな」

願望になっていた。ほんとのところは余裕だったのだが。

「そう言ってもどうせちゃんと点数とれてんだろうな、お前は」

見事に見抜かれた。さすが親友。

「俺のことよりも佐藤の心配した方がいいんじゃないか？」

「佐藤なら大丈夫だろ、やるときはやるやつだからな」

「……恋は人を盲目にするってのはいい例えだよな」

「どういう意味だよ、それ」

「そのままの意味だよ」

確かに俺も佐藤との付き合いは長いが恋愛感情にはならなかったな。たしかにいいやつではあるし見た目も悪くはないと思うが。まあ田中は気づいてないみたいだけど佐藤も田中に気があるみたいだしな。相思相愛だし、お似合いのカップルになるだろう。それがいつになるかは分からないが。

「はあ、まあいいや。明日も手抜くなよ、じゃあな」

「お前こそ遅刻はほどほどにな」

「ああ」

そう言っただけで田中は別れていった。

（それじゃあ帰って少しは勉強しますかね）

そう心のなかでつぶやいて俺も帰路についた。

このとき俺は次の日あんなことが起こるなんて思ってもいなかった。

第2章 開戦

翌朝、俺は学校に向かう途中、田中が他校の柄の悪い生徒と言いつ争っているのを見つけた。その隣には俺たちと同じ高校の生徒もいた。

（あの馬鹿、今日は不良に絡まれた生徒の面倒見てるのか……あれ？ あの絡まれてるやつ確か同じクラスだよな、名前なんてったっけ？ ……思い出せない。鈴木君「仮」でいいか）

このままほつといて喧嘩になったとしても、田中が負けるはずはないがそのせいで今日も遅刻されたら面倒だ、手貸すか……。

「やあ、みなさん朝からこんなところに集まってどうしたんですか？ 僕も混ぜてくださいいよ」

俺は愛想良く話しかけた。

「御崎……どうしたんだこんなところで？」

「それはこっちのセリフですよ、馬鹿やろう」ちよつと本音が漏れてしまった。

「何だお前いきなり出てきて、俺はこいつに用があるんだてめえはひっこんでろ」

不良はいきなり喧嘩腰で突っかかってきた。

「あなたこそうちの学校の生徒になにか用でもあるんですか？」

呆れながらもあくまで丁寧な口調で聞く。

「それはこいつがいきなり喧嘩売ってきやがったんだ。立派な用事だろ？」

「オーケー、全部理解した。」

「そうだろう？ だつたすっこんでろ」

「お前らウザいさつさと引つ込め」

いきなり俺の態度が変わって少し怯んだようだがそこはさすが不

良すぐに手を出してくる。

「調子こきやがって」

そう言って殴りかかってきたのを難なくかわす。

（ちよつと出方間違えたかな、このまま喧嘩したら警察とか呼ばれるかもしれない）

「仕方ない、ちゃっちゃんとやりますか」

そう呟いて、一瞬で相手の懐に入り、そのまま足をかけて引き倒した。柔道でいうところの大外刈りだ。そのままベルト部分に隠してたサバイバルナイフを引き抜くと倒れている男の喉元に突きつけた。周りから見えないように袖の中に隠して。その男は何が起こっているのか理解できなかったようだ。

「怪我、したくないなら俺たちに関わらないでくれないかな」

俺がそいつの耳元でそう呟くとやつと状況を理解したようで小刻みに何度も頷いていた。それを確認してゆっくり喉元からナイフを離す。

「と、いうわけなので、もううちの生徒たちにちよつかいださなidekudasaiね、ほら行くぞお前ら」

「え、あ、ありがとうございます」

そう言って鈴木君「仮」は走っていった。

「さすが御崎だな、俺がいくら言ってもしつこかったのにこの数十秒で追い払なんて」

「面倒になりそうだったからちよつと切り札をね」

「……？」

田中はよくわかってないようだったが、わざわざ説明するほどのものでもないしな。

「そんなことよりも俺たちも学校行くぞー」

「ああ、そうだな」

そのときの不良はとても青ざめていてしばらくそこを動けずにした。

「と、いうことがあったんだ」

学校に着いてから今朝の出来事を佐藤に話した。

「つまり御崎は脅したのね？」

「人聞きの悪いこというな、ちょっと技かけて一言忠告しただけだぞ。それに俺なんかが脅したって不良が黙るわけないだろ？」

「うん、それもそうね」

実際はそんなことはないのだが佐藤は直接俺の喧嘩を見たことがないし、なるべくそういうことは避けるようにしてるのでそこそこスポーツが出来るという程度の認識しかないのだろう。

「いや、断言されるのも結構かないしいんだけど……」

「事実でしょ」

俺はもう反論するのを諦めた。これ以上言い合っても無駄だと思っただからだ。

「それにしても佐藤がマスクしてるなんてめずらしいな。風邪でも引いたのか？」

今まで俺たちの会話を聞いていた田中が訊ねる。

「む、私だって風邪くらい引きますー」

すねた感じで佐藤が答える。

「そういう意味じゃなくて、体調は大丈夫なのか？」

「別に平気よ、微熱があるだけだし」

「それならいいんだけど……」

田中も佐藤が今回のテストを受けられなかったら留年してしまうことを知っているので特に注意したりはしなかった実際は病欠なら再試験を受けることができるけど木下のことだから何かあるか分からないだから佐藤も多少無理してでも学校にきたのだろう。それにしても佐藤が風邪を引くなんて本当にめずらしいな……。

そうしているうちに木下が教室に入ってきて答案用紙を配り始めた。

（今日は最初から木下か）

俺は心の中で毒づいた。昨日のこともあるので皆はすでに自分の席

に着いていた。

十分後――

佐藤は明らかに体調が悪化していた。前にいる自分ですら気づいているのだからクラスの皆も気づいているだろう。田中もかなり気にしているようだ。さすがにテスト中ではどうすることもできない。

――ガタンッ！

ついに佐藤が倒れたようだ。

「テスト中に故意的に倒れるのは違反行為意とみなす。さあ教室から出て行ってくれ」

木下が特に感情も込めずそう言った。これにはさすがに誰もがむかいつた。文句を言ってやろうと立ち上がったその時――

「それはいくらなんでもひどいんじゃないですかっ！ 佐藤は体調が悪くて倒れたんです。それを故意的にとかいくらなんでもひどすぎるでしょ！」

本気で怒っている田中が言い放つ。

「どうして君が彼女が体調が悪いなどと言えるんだ？」

「そんなの見れば誰だってわかるじゃないですか！」

「たとえそうだったとしても体調管理が出来なかったのは彼女の落ち度だ、しかしなにも保健室に行くとは言わない。もちろん0点扱いになるがな」

田中は一瞬安堵した表情になったがすぐに驚きの表情に変わった。

「どうしてですかっ！ 体調が悪くて途中退室なら再度試験を受けられるはずじゃないんですか？」

「それ以上いうようだったらお前も0点にするぞ」

「うっ」

「いいのよ田中。……すみません、保健室に行かせてもらいます」

「俺は0点でもかまわないので佐藤を保健室までつれいきます」

「……好きにしろ」

はき捨てるように木下が言った。

「ちよつと田中」

「俺はいいから」

そう言つて田中は佐藤に肩を貸して教室を出て行った。その時間に田中が戻ってくることは無かった。

俺はそのテストが終わつた後、佐藤の様子を見に行くことにした。「佐藤の様子はどうだ」

椅子に座つていた田中に訊ねる。

「ああ、今は寝てるよ」

「そっか」

田中は未だに木下に怒りを感じているようだった。

「……御崎」

「ん、どした？」

「話があるんだ」

「そっか、ここで話すか？」

「いや、長くなりそうだから放課後にでも」

「分かった。次の時間はちゃんと出るよ」

「ああ」

そうして俺は教室に戻った。田中は鐘がなるぎりぎりに戻ってきた。

放課後――

誰も残つてない教室で田中が訊ねてくる。

「どうする？」

「何が？」

もちろんなんのことも分かつているが、あえて訊ねる。

「佐藤、このままだと留年しちまうだろ、それについてどうしたらいいと思う？」

どう思つじやなくてどうしたらいいと聞くのが田中のいいところだ。

「あれは木下が勝手に言ったことだろ？ 他の教師……坂下あたりに相談すれば再試験くらい受けさせてくれるんじゃないか？」

「さっき坂下先生に相談に行ったんだ」

「それで？」

「無理だつて、言われた」

「どうして？」

「坂下先生は校長先生にまで言ってくれたそうなんだ。でも校長先生が木下が受けさせないっていうならそうなんだろう、つて」

「そうか」

（木下の影響力はもうそこまでいつてるのか）

「お前はどうするつもりなんだ？」

俺はいつも正攻法で解決しようとする田中がこれからどうするつもりなのか気になったから聞いてみた。

「木下を学校から追い出そうと思う」

「お前自分が何を言ってるのか分かってるのか」

「もちろん、その上で協力してほしいんだ」

「いいぞ」

田中が出した提案は普通ならおかしいな考えだろう。他の人から見れば留年くらいでっと思うかもしれないがこれほどまでに田中は佐藤のことを思っているってことだろう。だから二人の親友である俺は悩むことなくその場で決断する。

「そうか、ありがとう。具体的な案は三日後の日曜日に、それと佐藤には秘密にしておいてくれると助かる」

田中も俺が断らないと思っていたのだろう、すぐに話を進める。

「ああ、わかった。けどひとつ条件がある。俺はあくまでサポートしかない。行動するのはそっちで頼む。俺も目つけられるのは勘弁してもらいたいからな」

「それはもちろん」

そう言つて、田中は教室を出て行った。これは上手い具合に話が進んだな。木下に関しては手を出さないことにしてたんだけど仕方

ないか。それに実際木下が邪魔なのは事実だし、丁度いい機会か。でも一週間前に同じような依頼されて断ってるんだよねー。でもこのこと知られたら気まずいし、かといってこちらから声をかけるのもなー。そこで十分ほど悩んだ。

結局言っしかないと思い、ある人に電話をかける。

さて引き受けたはいいいけど具体的にはこれからどうするか。相手が木下なら戦争しかける気ではないといけないな。そうしなければこちらが喰われてしまう。やるなら全力で、楽しくやらないとな。これは早速帰って策を練らなければ。

「さあ……開戦だ」

そう呟いた俺の口元は無意識のうちにかすかに嗤っていた。

第3章 計画実行

三日後――

午後の一時になって田中が家に来た。インターホンを鳴らしてから入ってくる。田中もそれが当たり前なのでそのままリビングまで入ってきた。

「よう」

田中が軽く手を挨拶する。

「おう、その辺適当に座っててくれ」

そういつて台所でインスタントの紅茶を作って出してやる。それから十分ほど無言が続いた。

「今日は両親は家にはいないのか？」

最初に口を開いたのは田中だった。

「ああ、今日は朝から妹と三人で出かけてったよ」

「そうか、じゃあ早速、本題だ。なにか案は浮かんだのか？」

「そついうのは言いだしつpeg先じゃないのか」

あまりに田中が追い詰められたように話すので、俺は軽く冗談混じりに言った。

「それもそうだな」

そつして田中は木下を追い出すための方法を話し始めた――

その話が終わって一番最初に抱いた感想は、あまりに幼稚すぎるといことだった。田中の提案は、こちらが罫を張り、木下に校長でも庇いきれないほどの不祥事を起こさせるというものだった。たしかに方向性では間違つてはいないが具体性が一切無い。その上こちらのリスクが大きい割りに確実に木下を追い出せるようなものではなかった。それに、普段はまじめなやつだからこの程度が限界だろうとも思っていた。

「その程度の場合では話にならない」

多少の自信があつたらしい田中を一言で切り捨てる。

「そつか……」

少し残念そうだが反論する気はないようだった。

「それじゃあ、御崎の案を聞かせてくれるか？」

「ああ、いいぞ」

俺は不適に笑いながら三日間考え抜いた案を話し始めた。

「いいか、まずは現状の確認だ。今学校にいる教師、権力はほとんど木下が握っている。それに対してこちらはたった二人だ。坂下も木下に対抗できるひとりだが強引に木下を追い出そうとはしないだろうから戦力には数えられない。もちろん佐藤は論外だ」

田中は頷きながら聞いている。

「武力行使では無理だろう。だから策に嵌めてしまふ他に方法は無い。そついう点ではお前の考えは間違つてない。問題は、木下をどついう方法でどのように追い出すかだ」

そこで俺は一拍置いてからその二点について詳しく話す。

「まず、木下の追い出し方。これは、教師をやめさせるか、長期休

暇を取らざるおえない状況まで追い込むことがいいと思う。その場の状況に応じては、どちらでも可能な状況を作ることが必要だ。それには木下の不祥事、主に校長や他の教師を脅している証拠を見つけて出すことだろう。でもあの木下だ、そう簡単には見つからない。あるいはそんなものはないと考えたほうがいいと思う」

「だったらもう木下を辞めさせるのは不可能じゃないか」
焦れたように田中が口を挟む。

「そんなに焦るな。そのために俺が策を考えたんだろう」

「なにか案があるのか？」

「だからそう焦るなつて。もちろんあるに決まってるだろう」
そして話を続ける。

「とりあえず最初はその証拠があるかどうかを確認することだ。それには直接木下の持ち物を漁ったりしなきゃいけないだろうな。職員室はもちろん、最悪自宅まで行くかもしれない。これはりっぱな犯罪だがやる覚悟はあるか？」

「もちろん」

田中はしっかりとそう答えた。

「そこで、証拠が見つければ終わりだが見つからない可能性もある。まあその話は見つからなかったときにするよ」

「わかった」

「そうか、ならこれからの行動の具体的な内容を話す」

そうして結局七時まで、六時間近くも話込んでいた。

「最後の確認だ。実行は明日、道具や小細工などの準備は全部俺がやる。それでいいな？」

帰り際、玄関で田中に確認する。

「ああ、問題ない。準備のほうは任せた。それじゃ、また明日」

「じゃあな」

そう言つて田中は帰っていった。かなり緊張している様だったがそれぐらいで丁度いいと思った。なんせこれから俺たちはひとりの

人間の人生を狂わせるのだから……。

月曜日――

田中の最初のミッションは職員室の木下の机を調べることであった。しかし、平日のうえ他の生徒や教師がいるときは、もちろん行動はできない。決行は夜の１時に決まった。それまでは田中はいつも通りに過ごすことになって、木下に気取られないように注意するようにと御崎に言われていた。御崎は今日はさぼりだ。さぼりと言っても学校には来ていて、今夜学校に入るための下準備をしている。クラスメイトと挨拶を交わして、真面目に授業を受け、佐藤と話していたら一日はあつという間だった。あとは一旦家に帰り、時間になったら御崎と合流することになっている。

「それまで、どうするかな」

「え、何か言った？」

田中は独り言のつもりだったが佐藤に聞こえていたようだ。

「いや、ただ放課後どうするかなって言ったただだよ」

「ふーん。あつ！ 暇なら買い物付き合ってよ」

「まあ、べつにいいよ」

「特にすることもないし別にいいか。そんなに時間もかからないと思うし」

田中は小さい声で呟いた。

「ん、なんか言った？」

「いや、なにも」

「そう？　じゃあ行こっか！」

そうして二人で商店街を回り始めた。

「ちよつと休憩しよっか」

四軒目の店を出たところで佐藤が提案してきた。

「いいけど、休憩ってまだ店回る気なのか？」

「もちろん」

田中はいったい何をそんなに買うのか理解できなかったが佐藤が

楽しそうだからいいかと思ひながら二人で喫茶店に向かった。

「えと、迷惑、だったかな？」

喫茶店に着いてからしばらくすると、田中が黙っているのを怒っているとは勘違いしたのか遠慮がちに聞いてきた。

「そんなことないよ。たまには色々な店見て回るのも面白いし、それに佐藤と一緒にだし……」

「そ、そっか」

佐藤は照れたようにそう言うと言つて俯いてしまった。田中も自分言つてて恥ずかしくなり、二人とも俯くことになつてしまった。周りから見れば付き合い始めたばかりの恋人同士に見えてることだろう。「え、えっとそれじゃあ今日は私が奢るよ。お礼も兼ねてつてことで」

その空気に耐えられなくなったのか佐藤が先に切り出したが少し声が裏返っていた。

「買い物に付き合つたのは自分で決めたことだから気にしないでいいよ」

「それもあるんだけどね、お礼つていうのはこの前助けてくれたことも含めてだから遠慮しなくていいから」

「それこそ気にしなくていいのに」

「もう、私が奢りたいって言つてるんだからいいでしょ」

田中がなかなか頷かないので少しむくねながらそう言った。

「わかつたよ、じゃあ今日は奢つてもらふことにするよ」

「うん」

佐藤はとても嬉しそうにしていた。

喫茶店を出た後にもう二件店を回り解散することになった。

「ほんとに送らなくていいのか？」

「大丈夫だよ、まったく心配性だなー、田中は」

あきれた様な言い方だったがその顔は心配してもらえて嬉しいと

いう感じだった。

「今日はとっても楽しかったよ。それじゃあ、また明日ね」

「また明日」

そうして佐藤は帰っていった。これからすることを考えると少し胸が痛んだがそんな甘いことを言っていたら佐藤が留年してしまうことになる。田中は改めて気合を入れなおした。腕時計を見るとちようど八時を回ったところだった。

「あとは、何か食べて少し寝たらちようどかな。特に用意する物も無いって言ってたしな」

そしてコンビニに寄って弁当をひとつ買って帰った。

田中が学校に着いたのは十二時三十分のことだった。まだ集合時間まで三十分もあったが既に御崎も学校に着いていた。

「なんだ、ずいぶん早いな」

先に着いていた御崎が話しかけてきた。

「そういうお前も十分早いだろ」

それもそうだな、と呟いくと御崎は柵を乗り越えていった。田中も周りを気にしながら遅れないように御崎の後を追った。

「それじゃあ、少し早いが始めるか」

「それで、俺はどうすればいいんだ？」

「まあ、着いてきな」

軽い調子で返答すると御崎は校舎裏に向かって歩き出した。

「ここになにか用があるのか？ 校舎に入るなら早く行こう」

「はあ、正面から入れるわけ無いだろ」

御崎は田中の質問に呆れながら答えると一つの窓を指差した。

「ほら、そこに窓があるだろ。その窓は一階の男子トイレの窓で、あらかじめ鍵を開けておいたんだ」

他の窓には警報装置が付いているからな、と御崎は付け加えた。用意してあった木箱を持ってきてそれを足場に窓から中に入る。中に入るとすぐに鍵の束を渡してきた。

「その鍵で、職員室と木下の机と両方開けられる。それで脅しの証

掘になりそうな物を探しておいてほしい」

「それはいいけど、御崎はどうするんだ？」

「少し他にもやる事があってな、後から行くから先に行つてくれ」

「分かった」

そう言つて御崎と別れ、二階にある職員室に向かう。田中は先ほど渡された鍵を使ってドアを開け、職員室の一番奥にある木下の机を調べ始めた。まず、机の上にある物からとりあえず手にとって見ていく。そこに目当ての物はなく一段二段と引き出しを開けていくがそこにも証拠掘になりそうな物は無い。そうして一番下の引き出しを開けようと手をかけるが開かなかった。

「ここには鍵がかかっているのか。確か引き出しの鍵もあったはず」
ポケットから鍵を取り出して開けると、そこには一台のノートパソコンが入っていた。

田中と別れた後、三階にある自分の教室に向かった。一応木下が担任なのでここにもなにかあるかもしれないと思って探してもみたが、普段ほとんど教室にはいないので結局にも見つからなかった。しかし、元々想定範囲なので大した問題ではない。ここに寄つた理由は別にある。

「あのー、えっと、来ましたけど……」

教室の中を調べ終わると同時に後ろのドアからひとりの生徒が入ってきた。以前不良に絡まれてたのを助けてあげた鈴木君だ。（後で田中に確認したら本当に鈴木君だった）

「わざわざ悪いね、こんな時間に呼び出して」

「あの、やっぱり、この前助けてやったからお金とかよこせ、ってことでしょうか？」

「まあ、あながち間違つてないけど——」

「あの、これ今ある分全部です！」

そう言いながら財布を差し出してきた。

「いや、そうじゃなくて——」

「足りないなら後で用意しますので今はそれで勘弁してください！」

「いや、だから違うつて……」

「あ、パシリのほうもってことでしょ。それなら——」

「だから違うつて言ってるだろうが！」

鈴木君が俺の話を聞こうとしないのでついつい大声を出してしまつた。いくら夜遅くとはいえ大声で騒いだら誰かに見つかるとも限らない。だがそのおかげで鈴木君は落ち着いてくれたようだ。

「え？ 違つんですか？ じゃあ僕なんで呼ばれたんですか？」

「さつきからそれを話そうとしてたんだよ！ それをお前が邪魔するから」

「はあ、すいません」

何故怒られたか良く分かつてないようようだ。

「お前には頼みたいことがあるんだよ」

今度は邪魔されないように一拍置いてから、早口で一氣に言い切つた。

「頼み、ですか？」

「そう」

「それはいつたいなんなんでしょうか！」

なぜか期待に満ち溢れた眼差しを向けながら聞いてきた。

「あ、ああ……えつと明日の朝、木下が学校に着いた時間を教えてもらつと思つただけ」

多少戸惑いながら計画していたことを話す。

「はい、任せてください！」

なんの迷いも無くともうれしそうに頷いていた。いきなりこんなお願いをされて疑問に思わないのだろうか。

「えつと、頼んだのは俺ただけでそんなに嬉しそうなんだ？」

「それはですね、この前不良に絡まれたところを助けていただいた

ときの御崎君はともかつこよくて、僕もこんな風になりたいなと思つて。それに以来、僕にとって御崎君は憧れなんです。だから御崎君のお手伝いが出来るのが嬉しいんです！」

「そ、そうか。じゃあ明日頼んだぞ」

一歩後ずさりながらそれだけ伝えた。

「はい！ それじゃあ僕はこれで失礼します」

鈴木君は俺の様子に気づかなかつたらしい。頭を下げて教室を出て行ってしまった。こつも簡単に話が進むとはな。予想外の出来事だったが計画に支障はないだろう……たぶん。

鈴木がいなくなったのを確認してから職員室に向かった。

田中はノートパソコンを見つけたまでは良かったがパスワードが分からずになにも出来ずにいた。

「なにか収穫はあつたか？」

すぐ後ろから訊ねる。

「んー、このパソコン見つけたんだけど、パスワードがわかんなくて困つてたんだ。御崎はこういうの得意だろ、どうにかできないか？」

「いくら俺でもパスワードを解除できたりはしないな」

期待していたのだろう、肩を落としがっかりしている。

「それじゃあ、結局こいつは何の役にも立たないってことか」

「いや、そうとも限らないぞ。パスワード自体が分かればなんとなる」

その答えは予想していたのだろう、田中は特に驚きもせずここを調べた結果を話し始めた。

「木下の机の上、引き出し、ロッカー全部調べたけど木下を追い出す決定打になるようなものはなかった。それにパスワードが書かれたメモとかも無かった。あつたのはそのノートパソコンだけ。それと校長室も可能な限り調べたけどこつちも何もなしだったよ」

俺はわずかに驚いていた。俺が田中と別れてからまだ二十分ほど

しかたっていないが、この短時間でこれだのことを調べ上げるとは思わなかった。性格上、調べた範囲では見落としもないだろう。もしかしたら田中は案外こういうものに向いてるのかもしれない。「さすがにそのあたりは抜かりが無いってことか。やっぱり準備しておいてよかったな」

「準備？」

そんなことは聞いてないぞという目がこちらを向いていた。

「ああ、明日、木下の家に乗り込む！」

田中は、ここまでくるともう慣れたようで落ち着いた様子で頷いていた。

「このパソコンはどうするんだ？持ってくるのか？」

調べた部分がばれないように元に戻す作業をしている最中に田中が聞いてきた。

「いや、それも元の場所に戻しておいてくれ、鍵もかけ忘れるなよ」

「それはいいけど、それじゃあパスワードを手に入れても意味がないんじゃないのか？」

「それでもここは焦るよりも確実にパスワードを手に入れた方がいい。ここにはまた明日の夜くらいがいい」

「そうか、わかった」

田中は、納得したようであた作業に戻っていった。それから十分かけて丁寧に元に戻し、その場で解散した。

家に着いてからもう一度明日の計画を頭の中で確認して、メールで田中に送る。それから今日のことも軽く振り返ってみる。鈴木君に関しては思ったよりも簡単に話が進んだ。証拠に関しても最悪なものも見つからなくてもおかしくはなかったから、あのパソコンが見つかっただけでも十分な収穫だろう。しかし、何か引っかかるものがある。あの木下相手に順調に進みすぎてる気がする。佐藤あたりには聞いたらきつと買いかぶりすぎだとか心配しすぎだと言われそ

うだがこの計画に万が一もあってはいけない。田中もそうだが自分にも失敗できない理由がある。気のせいならそれに越したことはないんだけどな。わずかに不安を抱きつつも眠りに落ちた。

第4章 対決

翌日午前六時――

田中と俺は木下の家の近くまで来ていた。木下の家は一軒家で一人暮らしということもすでに調べてある。もちろん木下の車のナンバーは確認済みだ。木下はすでに家を出ていて、いつでも進入できるのだが鈴木君からの連絡が入ってから行動を開始することになっている。念には念を入れて木下が確実に学校にいる状況に成るのを待つことにした為だ。家の鍵は知り合いに頼んで用意してもらったので問題ない。

待つこと十分、携帯が鳴った。

『あ、御崎君ですか？ 今木下先生が学校に来たのを確認しました。しつかりとナンバーも確認しました！』

『了解。大丈夫だとは思うが念を入れて木下に見つからないように行動してくれ』

『はい！ ご武運をお祈りしてます！』

そう言って電話は切れた。具体的に俺たちが何をするのか言っていないけどな。言わない方があいつのためだよな。言ったら参加するとか言いかねないし。

「鈴木から？」

「ああ、それじゃあ始めますか」

そう言っ二人で木下の家に向かう。裏から入ったりすると逆に怪しまれるので正面から堂々と鍵を使って入ることにする。木下の

家族構成などを知っていたら怪しまれるかもしれないが、あの木下が近所付き合いがまともに出て来るとは思わない。玄関まで来て鍵を差し込んで回すと問題なく開いた。中に入るとまず意外と綺麗だったことに驚いた。しかしそう思ったのはほとんどの部屋が使われていないで放置されているからだだったが、それでも最低限の掃除はしているらしい。リビングに入ると小さなテーブルとソファ以外に物と呼べる物はほとんどなかった。

「いったいどんな生活してるんだろう？」

あまりに物がないので普段どんな生活をしているのかが、田中はまったく想像できないようだ。この階には何もないと判断して二階へ上がる。やはりここもほとんどの部屋が放置されている。その中で一部屋だけ異様に物が多い部屋を見つけた。

「ここか」

呟いて僅かな緊張を持ち中に入る。他の部屋とは違い、壁には本がぎっしり詰まった本棚が並んでいる。ベットと床の上には大量の資料が散乱しており、足の踏み場もない。その中で、部屋の隅に小さな机の上に起動したままであるパソコンを見つけた。画面をつけて見てみるとすでにログインされていた。これなら中身が調べられる！ そう思い、すぐに調べにかかる。田中には一応散らばっている資料を見てもらっている。このパソコンにはほとんどロックがかかっていないようでデータ内を検索したらすぐに目当ての物は見つかった。

「これは、校長が脅されている写真で、こっちが全教師の詳細。こっちはブラックリスト？」

そのブラックリストと書かれたフォルダの中を見ていくとただ名前だけが書いてあった。その中には御崎、坂下、佐竹、木村など自分を含む生徒、教師の名前が乗っていた。要するにここに書かれているのは木下にとって厄介な人物たちなのだろう。これらのデータを自前のUSBメモリにコピーしていく。

（それにしてもここまで徹底的に調べてるのか。相当用心深いのか

？ でもそんな用心深い人物がこうも簡単に自宅への侵入を許すだろうか？)

そこまで考えてからふと気づく。まさか泳がされていただけなんではないかということに。確かにここまでは順調だった。不自然に思っくらしいに！ その時、駐車場かの方から車の止まる音がした。嵌められた！

「田中！逃げるぞ！」

大声を出すのもためらわず田中に呼びかける。

「え？」

状況を理解できていないらしく、呼びかけに対して疑問で答える。

「早くしろ！」

そのとき田中にも音が聞こえたようで急いで荷物をまとめる。コピーが終わるなりすぐにメモリを引き抜き、逃げようとしたそのとき――

「これは、ずいぶんな客だな」

ドアの前に不適に笑う木下が立っていた。遅かったか。

「学校をサボった上に教師の家に泥棒か？ 御崎、田中」

完全に嵌められた。木下はすでにこちらの情報を掴んでいてその上で泳がされたんだ。俺たちを、俺を学校から追い出すために。

「なに、私も鬼ではない。その手に持っている物をこちらに渡せば警察沙汰は勘弁してあげよう。もちろんお前には学校は辞めてもらうけどな！」

木下は笑っている。自分の思い通りに事が進んで愉快で仕方がないのだろう。

「どうする？」

田中が不安そうに小声で聞いてくる。

「まあ、俺に任せな」

同じく小声で答える。予定では木下の相手はもつと先にするつもりだったがここで相手をするしかないようだ。

「俺がその要求に応じるとでも思っているのか？ このデータがあ

ればあんたを破滅させるのには十分だぞ？」

やられてばかりもいられないのでこちらからも言い返す。

「く、くははは」

木下は突然声を出して笑い始める。

「それをするには君のした事を話す必要があるのだぞ？そうすれば間違いなく警察沙汰だ。担任の教師の家に盗みに入る男子高校生二名。なかなかおもしろうそうな見出しになるだろうな」

笑うのを堪えるように話す。

「それに君がそんな愚者のような選択をするとは思えない」

「俺を買いかぶりすぎなんじゃないか？俺はそんな利口な人間じゃないぜ」

「だが現に私を相手にこうして取引をしようとしている。この圧倒的に不利な状況にこれが愚者の行いか？」

「それだつたらあんたに見つかった時点ですであんたの言う愚者なんだろうよ」

「それは気にする必要はない。なぜなら私が君よりも一枚上手だっただけのことだ」

木下は俺のことを見下ろすかの様に話す。が学生である俺に警戒を怠っていない。この圧倒的な状況になっても油断しないのはさすがだ。甘くみていたのはこちらの方か……。

「これが最後のチャンスだ。君の持っているそれをこちらに渡しさえすれば君たちは退学だけで済ましてやろう。ああ、そうだ何だつたら田中は学校に残してやってもいいし、佐藤も進級させてやろう。これほどの好条件は無いと思うが。後は御崎、君しだいだ」

「それだつたら俺は——」

「断る！」

俺が答えるよりも早く田中が答えた。

「俺たちのために御崎が高校をやめる必要なんてない。元々言い出したのは俺だ。だから俺が学校をやめる。それでいいだろう？」

元は田中と佐藤が一緒に進級するためだつてのに。明らかに目先

の事しか見ていない。田中の昔からの悪い癖で周りの人間が危機になつたらそのことしか見えなくなってしまう。

「残念だがその要求は呑めないな。こちらとしては御崎という人間が学校から居なくなるということが重要なんだ。君がやめても何の意味もないんだよ。それに私は御崎に聞いているんだ。君の意見は聞く気はないな」

いつもは決してしないような出来が悪い生徒に言い聞かせるような話し方だ。これだけ流暢に話せるなら十分教師としてやっていくのではないかと思うくらいに教師らしい話方だった。

「そんな！」

「落ち着けよ田中。俺はお前らのために学校をやめるほどのお人よしじゃない」

「ほう、自分のために親友を見捨てると？　やはり私が思つた通りの人間だな！」

嫌らしい笑みを浮かべながら木下が知つたような口を利く。

「勝手に話進めてんじゃねえよ。俺は学校を辞めないし、あんたの要求も呑まない」

「……そうか、結局君も口だけの理想主義者か。君のような人間の心を壊せば私が今まで味わってきた心の空白を埋められると思つたんだがな。君もはずれか」

今までの笑みは嘘のように消え、感情の読めない声で話し始める。
「それじゃあ、君にもう用はない」

今の発言から察するにあのブラックリストに載っていた人物は危険人物なんかではなくこれから苦しめるであろう人たちだったのであろう。木下が生徒や教師に対する異常な嫌がらせはその中から壊しがいがある人物を探すための理由しかない。だが今はそんなことは関係ない。今、木下に戦う意志がないならここが仕掛け時だ。

「そうはいかないさ。俺はあんたを学校から追い出すためにこんなことをしてるんだ。それにあんたにとって俺たちは興味を無くしたどうでもいい生徒のうちの一人に過ぎないだろうが俺たちにとって

あんたが危険人物だってことは変わらない。排除する理由には十分だと思うが？」

「今の君では私を追い出すことは不可能だろう。まず第一に証拠が不十分だ。第二に証拠を得るための手段が強引すぎた。第三に学校側は君と私だったら私の言うことを信じるだろう。第四に私が警察を呼べばそれで終わりだろう」

話方にまるで覇気を感じない。先ほどのやりとりでよほど興味が持てなくなっただろう。

「本当にそう思うか？」

「どういう意味だ？」

「その問題が全てクリア出来るとしたら？」

「そんな事が出来るなら是非聞かせてもらいたいな」

こちらの提示したことに少しばかり興味が出たようで話の続きを促してくる。

「まず第一の問題は、職員室にあったノートパソコン、これで解決だ」

「やはり君にはがっかりだよ。仮にそれが出来たとしてもここで私に言ったら意味がないだろう」

話せと促してきたのはあんなだけだな、声には出さず心の中で呟く。

「まあ、話は最後まで聞けよ。次に第二の問題だ」

木下は何かを言いたそうにしていたがやがて諦めこちらの話を聞く態勢をとった。田中も頷いて全てこちらに任せてくれている。

「これは、あんたが警察に言わなければいいだけ。第三の問題はあんたよりも学校に口出し出来る人物を味方につけること」

「そんな人物居るわけ……。そうか、坂下か」

ひとりで納得している木下の言葉を無視して進める。

「そして今一番の問題である警察への通報、これはすでにできない。なぜならあんたが警察に通報すれば学校でのことを話さなければいけなくなる。そうすれば学校で最悪の評判、教師たちにすら疎まれ

てる木下先生が無事で済むはずがない。そしてあんたは自分にリスクのあるときに行動しない。だから現状あんたが警察に通報することはない」

「ほう、なかなか考えたな。それがクリア出来たとして他の問題は どうするんだ？」

まるで自分が出した問題を俺が解いていくのを聞いて楽しんでい るような感じだ。しかしかまわず話を進める。

「第二の問題もさっきのと同じ理由で解決だ。たとえどんなに強引 だったとしてもばねなければ意味がない。第三の問題、これはさっ きも言ったように坂下先生が味方につけば、いやすでに味方になっ ているからこれも問題ない。今、この瞬間職員室のあんたの机から パソコンをとりだしているころだろな」

「……な！」「……え！？」

木下だけでなく田中も同時に驚いたような声を出した。木下もあ の真面目な教師の坂下がこのような事に手をだすとは思っていなか ったに違いない。そのうえこの瞬間徐々に自分が追い詰められてい っていることに気がついたのだろ。田中に関しては教えてないか ら驚くのは当然なんだが。

「そ、それでもパスワードがあるだろう。それが分からなければ意 味はないはずだ」

「それも問題ない。なあ田中」

未だに驚いたままで固まっていた田中に話を降る。

「え？ あ、ああパスワードならさっき見つけたんですよ」

「そんな、ありえない！」

先ほどまでの無気力な感じでもなく最初のように勝ち誇っている わけでもない。木下はこの状況に焦っている。そこに追い討ちをか けるようにしてパスワードを見つけた経緯を話し始める。

「用心深いあんたの事だ、パスワード一つにしても必ずどこかに書 き留めてると思った。もちろんそのまま書いてあるとも思わなかつ

たけど。それで田中に散らばっている資料を調べてもらってたんだ。まあ詳しいことは俺もわからないから田中に聞いてくれ」

そう言うとき木下は田中を恐ろしい形相で睨む。田中もそれに多少気おされつつも詳細を話し始める。

「この部屋に大量に散らばっている資料のなかに少しだけ日にあたって変色しているのが十枚あったんです。その十枚全部は書かれている内容に関してはどれも違ったけど全部英語で書かれていたんですよ。それを頭文字を縦に読んでいくとなぞ掛けのようなもので、後はこれを解いていただけです。なぞ掛け自体は大して難しくなかったですし」

「な……」

木下は絶句していた。俺たちが家に入ってから木下が来るまでの時間はわずか二十分、この時間でパスワードが隠されている事と念を入れて作ったであろう問題まで解かれてしまっただけこうなるのも無理はない。

「そのパスワードは既に坂下先生にメールで送ってあるからそろそろ中身を見終わるころだと思っぞ」

俺がそう言ったその時、タイミングよく携帯がなった。

『証拠は手に入れた』

ただそれだけが書かれたメールだった俺たちにとってはそれだけで十分。その文面を木下に見せる。

「これで全部の問題が解決だ。あんたの勝ち目はなくなったな」

「ああ、確かにこれでは私の負けだな。しかしそうなる前提が崩れるぞ？ 何もせず捕まるくらいなら今ここで通報して君らを道連れにするかも知れんぞ？ 君がそんな選択をするはずがない！」

木下はしてやったりという表情で言い返す。

「確かにそんなリスクがある選択はしたくないな。だから俺は提案するよ。お互いにとってもっともリスクが少なくて済む方法を」

「そんな方法があるとは思えないな」

「なに、簡単な事だよ。木下先生、あんた教師を辞めればいい。俺

たちの目的はあんたという存在が学校から居なくなること。そうすればこれ以上俺たちは手を出さない。そうすればあんたは警察に捕まらない。なかなか良い提案だろ？」

「私だけがリスクを負えと？ そんな提案受けると思っているのか？」

「あんたはこの提案を受けるさ。あんたは警察に捕まるよりは職を失う方がマシだと思ってるからな。違うか？」

「はは、違ういな。いいだろう。その提案を受け入れよう」

木下はなぜか笑いながら提案を受け入れた。これで問題解決かな。そう思ったときに今まで黙って話を聞いていた田中が小さな声で話しかけてきた。

「……ほんとにこれでいいのか？」

「どういうことだ？」

「今は追い出せたとしてもあの木下なら学校を辞めても俺たちに復讐してくる気がして」

「それなら心配いらないぞ田中」

俺が答えるよりも早く木下が答える。俺たちの会話が聞こえていたようだ。

「どうしてですか？」

田中はその言葉は信じられないというふうに怪訝そうな声で聞き返す。

「私は獲物は選ばない主義でね。壊しがいいのある人間なら誰でもいいんだよ。だから君たちに拘る必要もない。それに勝てなかった相手にすぐに復讐するほどの馬鹿でもないさ」

「そう、ですか」

田中はあまり納得がいかないようだったが、とりあえず引き下がつた。

「それで私はこれからどうすればいいんだ？」

「まずは学校、教師、生徒に関する情報全ての破棄。他には辞表かいてくれるだけいい。あとはこっちでやるんで」

「分かった」

木下が資料とパソコン内のデータを削除するのを確認して、他に残っていないかも調べ、あとはすぐに駆けつけてくれた坂下先生に任せて俺たちは木下の家を後にした。

第五章 エピローグ

木下はあの後すぐに退職した。そのことがみんなに伝わると教師まで授業放り出して喜んだそうだ。俺たちのしたことは坂下先生以外学校の誰にも知られていない。もちろん警察にも。それから佐藤も再試験を受けられることになった。坂下先生は「再試験は受けられても赤点だったら留年ですよ」と言っていたが今の佐藤が赤点なんてことはありえないだろう。今は佐藤がテストを返されるのを田中と二人で待っているところだ。

しばらくして佐藤が職員室から出てきた。

「どうだった？」

田中が待ちきれないように佐藤に聞く。

「もちろん合格したよ」

佐藤はこれが当然といったふうに落ち着いて振舞っているがとても嬉しいと思っているのは誰が見ても気づくだろう。

「そうか、よかったー」

田中は心底ほっとしたようだった。もちろん俺もだが。

「これでみんなで進級できるね！」

佐藤が嬉しそうにそう言う。田中はもちろんだが俺もちゃんと合格している。

「よし、遊びに行くぞー！」

「おー！」

佐藤が声高々に宣言する。そしてそれに田中が同意する。

「御崎も行くでしょ？」

「俺はパス」

「えー、どうして？」

「俺が行ったらお邪魔だろ？」

冗談交じりに告げる。

「へ？ そんなことないよ！」

佐藤の顔は赤くなっていて動転してるのがよく分かる。田中を見るとこちらも顔を赤くして今にも余計な気遣いなんかなくなっていい、
と言出しそうだった。

「実際、他にも少し用事があるんだ。だから二人で楽しんでこいよ」
「それなら、仕方ないか」

一応納得したようではしぶしぶ同意する。

「じゃあまた明日な」

俺はそう言つて二人と昇降口で別れた。

「じゃーねー」

「また明日」

二人の声に軽く手を上げる。

「それじゃ、私たちも行こっか」

「そうだね」

そう言つて二人も俺とは逆方向へ歩き出す。振り向いたときには
二人はしっかりと手を握り合っていた。

御崎たちの学校から三キロほど離れた場所に立つそこそこ大きい
病院。そこのある部屋に俺を除いて二人の人間がいた。ひとりは学
年主任の坂下先生だ。もうひとりは同じくうちの高校の教師だが今
は怪我で入院している佐竹という教師だ。この二人は今回の件をい
ろいろ手伝ってくれた。というよりも田中よりも先に俺に木下のこ
とを依頼してきた人間でもある。

「いやー、ご苦労様。あ、これ今回の報酬ね」

ベツトで体だけ起こした佐竹が明るい声で言いながら封筒を渡してくる。

「いいんですか？ 教師がこんなことして」

答えは分かりきっていたが呆れながら一応聞いておく。

「いいの、いいの、ばれてないからね」

「そすか」

「それにしても僕の依頼は断ったのに田中君からののは受けるんだね」
笑顔のまま言ってくる。

「あいつは親友ですからね。あなたの依頼を受けたのはそのついでですよ。俺にとってはアルバイトみたいなものなんで」

「佐藤さんと田中君の恋のために二人の障害を取り除いてあげる。

感動的な話だね！ でも君は少し損な役回りだと思うけどね」

「いいんですよ俺は。こういうことしてる人間ですし。そんなことより坂下先生があなたとグルだったというほうが驚きですよ」

「ああ、私は大学が佐竹と同じでね。あのころは二人でいろいろやったものだよ。今回の君と田中君みたいに。しかしまさか高校でお互い教師として合うとは思っていなかったけどね」

二人に接点があることも意外だが普段真面目な坂下先生が学生時代いろいろやっていたという事のほうが驚きだ。

「高校では佐竹が学校の支配者、私がその補佐みたいな感じでやっていただけ」

「木下が来たんですか……。でも二人でも木下を追い出せなかったんですか？」

「それが一度やったんですけど、佐竹がミスしまして……」

「ミスってそれで木下にやられて怪我したんですか？」

それは俺が知っている佐竹さんらしくはないが実際怪我をして未だに入院しているのは事実だ。

「それは違うんだな、御崎君。ミスをして木下にやられたんじゃない、怪我して木下に主導権もってかれたんだな」

なぜか自慢げに行っているのが謎だ。

「ああ、それじゃあ坂下先生が木下を押さえ込めたのはその時先生も木下を追い出そうとしてたからそれを警戒してのことだったんですね」

これで疑問がまたひとつ減った。しかし、未だに木下の行動理由は分からなかったが居なくなってしまった今では知ることはできないだろう。

「そういえば今後の相談なんだけど、御崎君しばらく学校の支配者やってよ」

佐竹さんが軽い調子でものすごく重要なことをさりりと言う。

「なんで俺なんですか……」

そんな予感はしていたが簡単に納得できる話じゃない。

「坂下はやっぱ裏からの支配は慣れてないし、君なら適任かと思つて」

「そもそも学校に支配者とかいるんですか？」

普通の高校ならこんな支配などはありえないはずだ。

「ほら、うちの高校は問題児というか個性的な生徒ばかりじゃないか。それに教師も変わり者が多いし。僕らや君たちが良い例だろう？」

「それがどう関係あるんです？」

「君ならすぐ分かるだろう？ 要するに教師も生徒も問題起こすからそれが起きなさせないように行動する、そして起きた場合の対処なんかが必要になってくるのよ。いじめや犯罪、今回の木下のようなね。今回の一件を見ていて君なら僕の後を継げると思ったんだよね。もちろん僕も退院できたら変わるつもりだ。それまで頼めないかな？」

「いやですよ。なんで俺がそんなこと」

「田中君や佐藤さん、彼女たちにも危険があるかもしれないよ？」

「はあ」

今までと変わることをない笑顔のまま俺にとって痛い部分を的確

についてくる。やはりこの人には敵わない。佐竹さんはやはり木下なんかよりもずっと恐ろしい。

「わかりましたよ」

しぶしぶ同意する。

「よし決まり！ それじゃあ基本は坂下がサポートしてくれるからなにか分からないことがあったら彼に聞いたらいいよ。それ以外になにか手助けが必要だったら僕に言えば大抵の物なら用意してあげるし、出来る限りのサポートもする」

「分かりましたよ」

どうやって用意するのかは怖くてとても聞けない……。

「それじゃあ明日からお願いねー」

「はいはい」

適当に返事しながら俺は病室から出る。

「俺は俺のやり方でやりますからただあなたの言いなりになったりはしませんよ」

病室に向かって小声で宣言する。

こうして俺はただの学生から学校の裏の支配者になった。廊下の鏡に写った自分の顔はこれから起こることを楽しみにするような笑顔だった。

（後書き）

初めて書いた作品なのでストーリーや文構成におかしなところがあるかと思っています。

できれば、作品の感想なんかを書いてくれると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5800q/>

学園戦争

2011年5月16日20時57分発行